HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	コリャーク語の副詞節 : 名詞化タイプと非名詞化タイプ
Author(s)	呉人, 惠
Citation	北方言語研究, 6, 1-23
Issue Date	2016-01-20
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/60789
Type	bulletin (article)
File Information	01kurebito.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北方言語研究 6: 1-23（北方言語ネットワーク編，北海道大学大学院文学研究科，2016）

コリャーク語の副詞節
―名詞化タイプと非名詞化タイプ―*

呉 人　惠
（富山大学）

1.　はじめに

本稿では、コリャーク語[1]（Koryak：チュクチ・カムチャツカ語族）において副詞節の動詞をマークする 2 つのタイプについて考察を加える。

副詞節化の標識として格接辞が動詞に付与されることは、シベリア諸言語に共通する統語的特徴のひとつとして考えられている (Anderson 2006)。Anderson (2006) をまとめると、シベリア諸言語の格接辞による従属節化には、①名詞化を経て格接辞と結びつくタイプ（以下、本稿では便宜的に**「名詞化タイプ」**）、②裸の動詞語幹あるいは（半）定形動詞が格接辞と直接結びつくタイプ（以下、本稿では便宜的に**「非名詞化タイプ」**）の 2 つのタイプがあり、それぞれのタイプを示すものとして次のような言語がある。

① **名詞化タイプ**：チュルク語族、モンゴル語族、ツングース語族、ニヴフ語、ユカギール語族、チュクチ・カムチャツカ語族、オビ・ウゴール諸語、サモイェード諸語

② **非名詞化タイプ**

　②-1　裸動詞語幹＋格標識：チュクチ・カムチャツカ語族、ユピック語、ユカギール語族

　②-2　半定形動詞＋格標識：北サモイェード諸語、イェニセイ語族

　②-3　定形動詞＋格標識：イェニセイ語族（ケット語、ユグ語）

チュクチ・カムチャツカ語族に属するコリャーク語は、Anderson (2006) の指摘のとおり、名詞化タイプと非名詞化タイプ②-1 という 2 つのタイプを示す。次の (1) は名詞化タイプ、(2) は非名詞化タイプの例である（以下の例の [　]AC は副詞節の範囲を示す）。

---

* 本稿は、2010, 2011, 2014, 2015 年にロシア連邦ハバロフスク市でおこなったコリャーク語の聞き取り調査で得られたデータ、ならびに、Ajatginina & Kurebito (eds.)(2006) のデータに基づいて書かれている。これらの聞き取り調査は、文部科学省科学研究費補助金基盤研究 B「北東アジア危機言語の記述と類型に関するネットワーク構築」（2320075、代表：津曲敏郎［北海道大学］）、基盤研究 C「コリャーク語形容詞述語構造に関する記述・類型研究」（22520394、代表：呉人惠）、基盤研究 C「『コリャーク語文法』完成に向けた調査研究―ヴォイス・節構造の諸相を中心に」（26370480、代表：呉人惠）によりおこなわれた。調査には Ajatginina Tat'jana Nikolaevna 氏 (1955 年マガダン州セヴェロ・エヴェンスク地区第 5 トナカイ遊牧ブリガード生まれ、女性) にコンサルタントとして協力していただいた。ここに記して謝意を表したい。

[1] 本稿の対象となるコリャーク語は、チャウチュヴァン (cawcəvan) 方言である。チャウチュヴァン方言の音素目録は以下のとおり：/p, t, t', k, q, v, ɣ,ʔ, ʕ, c, m, n, n', ŋ, l, l', j, w, i, e, a, o, u, ə/。/t', n', l'/ はそれぞれ /t, n, l/ の口蓋化を表わす。/c/ の音価は [t͡ʃ]。

(1) Jəqmitiw k-ena-n-ə[2]-kj-aw-ŋəvo[3]-ŋ-Ø,
in.the.morning IPF-1SG.P-CAUS-E-wake.up-CAUS-HAB-IPF-3SG.A
[melɣ-at-ə-nv-ə-ŋ]AC.
fire-VBL-E-place-E-DAT
「朝，彼／彼女は火を焚くために私を起こす」

(2) [Jajt-ə-k]AC, kəta ɣa-qlev-o-ŋvo-ta[4].
return.home-E-LOC only.then COM-bread-eat-INH-COM
「家に帰ってから、パンを食べ始めなさい」

名詞化タイプの (1) では、目的節 melɣ-at-ə-nv-ə-ŋ は＜動詞語幹 melɣ-at－挿入母音－名詞化接辞 -nv「～する場所」－挿入母音－与格接辞 -ŋ＞という構造になっている。一方、非名詞化タイプの (2) では、時間節 jajt-ə-k は＜動詞語幹 jajt－挿入母音－場所格接辞 -k＞という構造になっている

本稿では、この 2 つのタイプについて、大きく次の 3 点に関する考察を加える。

A) コリャーク語の副詞節化における名詞化・非名詞化という 2 つのタイプの形態、統語、意味的特徴はなにか。
B) Anderson (2006) によれば、周辺の諸言語の中でユカギール語 (Yukaghir) とユピック語 (Yupik) は、コリャーク語同様、②-1 タイプを持つようであるが、その実態はどのようなものなのか。コリャーク語との類似性はあるのか。
C) 名詞化・非名詞化という 2 つのタイプは、副詞節以外の他の非定形動詞の形式にも見られるか。

ところで、主節に対する副詞的な従属が形態的に標示された動詞は、「副動詞 (converb/деепричастие)」と呼ばれるが、それによって表わされる範囲は研究者によって同じではない。まず問題になるのは、名詞化タイプも副動詞とみなすかどうかである。名詞化タイプは、Anderson (2006) も区別しているように、副動詞ととらえないのが一般的であるが（亀井等編著 1995）、その一方で、Nedjalkov (1998) のようにツングース系の言語について、副動詞形成専用接辞に加え、①のような名詞化タイプも副動詞ととらえている研究者

---

[2] /ə/ は、語頭・語末での 2 子音連続、語中での 3 子音を避けるための挿入母音。その他の例についても同様。

[3] -ŋəvo は、「始まる」「始める」の意味を表わす自立動詞に由来する語彙的アスペクト形式である。下の例のように完了形に接続する場合には、始動アスペクトを表わすが、この例のように不完了形についた場合には、習慣アスペクトを表わす（呉人 2010）。
Ənno lajv-ə-ŋvo-j-Ø.
3SG.ABS walk-E-INH-PF-3SG.S
「彼／彼女は歩き始めた」

[4] 動詞語幹 qlev-o「パンを食べる」＋習慣アスペクト- ŋvo に共同格接辞が接続したこの形式は、主節の述語が非名詞化タイプを示すものである。これについては、5.2. で述べる

もいる。

次に問題になるのは、コリャーク語に見られる ②-1 のような非名詞化タイプをどのようにとらえるかである。ちなみに、コリャーク語、さらには同系のチュクチ語やアリュートル語の非名詞化タイプは、管見のかぎり、副動詞ととらえるのが一般的である (Haspelmath 1995, Nedjalkov 1998, Zhukova 1972, Kibrik i dr. 2000, Skorik 1977, Dunn 1999)。ただし、この中で格接辞との関係を明示しているのは、Zhukova (1972) と Kibrik i dr. (2000) のみである。しかし、これについてはさらに詳細な検討が必要である。非名詞化タイプは、名詞化接辞がなんらかの要因で落ちたとするか[5]、格接辞が副詞節化接辞に転用されたとするかによってとらえ方が変わってくるからである[6]。

以上の理由から、本稿ではコリャーク語の副詞節の格接辞による非定形動詞の形式に対して、慣例的に用いられている「副動詞」という用語は基本的には用いずに考察を進めていく（ただし、先行研究について言及する場合にはそのかぎりではない）。

2.　コリャーク語の副詞節

本論に入る前にまず、本稿で対象とする副詞節がなにを指すのか、その範囲を画定しておきたい。というのは、コリャーク語では副詞節と等位節の境界線が必ずしも明確ではないからである。コリャーク語において、主節に対する従属を示す最も明確かつ典型的な形式は、上述のような名詞化あるいは非名詞化タイプである。しかし、コリャーク語では、このような典型的な従属から、典型的な等位へと連続相をなしているととらえた方が、より実相に合致する。その連続相は、次の図式に見るように、従属度により大きく 4 つの段階に分けられる（詳細は Kurebito 2012 を参照のこと）。

従属 ←――――――――――――――――――――――――→ 等位			
MC:[AC:NFV]FV	**MC:(FreeCLM)+FV, AC:(FreeCLM)+NFV**	**MC:(FreeCLM)+FV, AC:FreeCLM+FV**	**MC:FV, MC:FreeCLM+FV**
＜段階 1＞	＜段階 2＞	＜段階 3＞	＜段階 4＞

（MC=主節, AC=副詞節, CLM=接続詞, FV=定形動詞, NFV=非定形動詞）

図 1：従属から等位への連続相

2.1.　段階 1

＜段階 1＞は、副詞節が主節の中に割り込む形で埋め込まれた、最も従属度が高いタイプである。次の (3) がこのタイプであることは、[　] 内の自動詞語幹 vella「立つ」と与格接辞 -ŋ からなる副詞節、すなわち vella-ŋ に先行する名詞項 ənan「彼／彼女が」が能格形を取っており、vella ではなく、それに後行する他動詞 ko-ncecʕan’-ŋəvo-ŋ-ne-n「彼／彼女／そ

[5] A. L. Malchukov 氏からは私信にて、非名詞化タイプは名詞化接辞が失われた、あるいは、浸食されたものではないかとのコメントをいただいている。

[6] Coupe (2006) は、副動詞形成接辞が格接辞に由来する言語があるとして、チベット・ビルマ系のボド語派の従属節マーカーについて論じた Genetti (1986) をあげている。ただし、そこで論じられているのは、すべて名詞化タイプであり、動詞語幹に直接、副動詞形成接辞が付加された非名詞化タイプの例はない。

れが彼／彼女／それを見ている」に一致していることから明らかである。

(3) ə-nan, [vella-ŋ]AC ko-ncecʕan’-ŋəvo-ŋ-ne-n.
3SG-ERG stand-DAT IPF-watch-HAB-IPF-3SG.A-3SG.P
「彼／彼女は立って、それ／彼／彼女を見ていた」

2.2. 段階 2

＜段階 2＞は、(4) のように、＜段階 1＞のように副詞節が主節に割り込むことはないが、非定形動詞の形式を取っており、かつ、副詞節にも主節にも任意に接続詞が現れるタイプである。なお、接続詞の部分は任意であるため、( ) で示す。

(4) [(Məjew) ajɣəve unmək muqet-ə-k]AC, (emʕu=qun)
because yesterday very.much rain-VBL-E-LOC so=INT
n’uce-l’q-ə-n unmək imciɣu-i-Ø.
earth-surface-E-ABS.SG very.much get.wet-PF-3SG.S
「昨日、大雨が降ったので、（だから）地面がとても濡れた」

2.3. 段階 3

＜段階 3＞では、(5) のように、副詞節の述語は定形動詞になるが、義務的に接続詞を取るという点で、この段階でも従属関係が認められるものとする。

(5) [Ekilu meki-Ø je-ketɣucʕet-ə-ŋ-Ø]AC, to[7] ŋellə-Ø
if who-ABS.SG POT-be.stronger-E-POT-3SG.S and herd-ABS.SG
j-ekmin-ŋ-ə-ni-n cimqəp-Ø.
POT-take-POT-E-3SG.A-3SG.P part-ABS.SG
「もし誰かが強かったら、（そしたら）群れを半分取るだろう」

2.4. 段階 4

＜段階 4＞では、2 つの節の述語は定形動詞で現れ、両者を連結する接続詞だけが 2 つ目の節の初頭に現れる。したがって、この段階では 2 つの節は、従属関係ではなく等位関係にあると考えられる。

(6) Maleta t-ə-ko-n-ɣəcɣol-av-ŋ-ə-naw wəww-o to
slowly 1SG.A-E-IPF-CAUS-upper-CAUS-IPF-E-3PL.P stone-ABS.PL and

---

[7] ここでは、コリャーク語の接続詞 to「そして」の意味でグロスをつけているが、構文的にロシア語の条件文を従属節に持つ複文の主節初頭に現れる接続詞 то の借用である可能性も否定できない。
Если завтра будет дождь, то мы на улицу не пойдём.
「もし明日雨だったら、外に行かないようにしましょう」

ŋanqo　t-ə-ko-ŋvo-ŋ-naw　j-ekmin-ŋ-ə-jv-ə-k.
from.there　1SG.A-E-begin-IPF-3PL.P　try-catch-try-E-INT-E-INF
「私はゆっくりと石を持ち上げ、そしてそれから魚を捕まえようとし始めた」

以上の 4 つの段階のうち、本稿で対象とするのは、副詞節に非定形動詞が現れることにより、形態的に従属が明らかな＜段階 1＞と＜段階 2＞である。

3.　副詞節の動詞をマークする 2 つのタイプ

本節では、副詞節の非定形動詞が取る 2 つのタイプ、すなわち、名詞化タイプと非名詞化タイプについてみていく。

3.1.　名詞化タイプ

名詞化タイプとしてこれまで確認されているのは、時間節を形成する -kena-jtəŋ「～するまで」「～する前に」と、目的節を形成する -nv-etəŋ/-nv-ə-ŋ/-nv-ə-k「～するため」である[8]。

3.1.1.　-kena-jtəŋ「～する前に」「～するまで」

-kena-jtəŋ は、*otnositel'nye prilagatel'nye*「関係形容詞」(Zhukova 1972:156) を形成する接辞 -kena に方向格接辞 -jtəŋ が接続したものである。

(7)　ʕəm-tal-Ø　na-ko-n-etet-aw-ŋəvo-ŋ-ə-n,
bone-crush-ABS.SG　INV-IPF-CAUS-boil-CAUS-HAB-IPF-E-3SG.P
[otɣ-at-kena-jtəŋ]AC.
soft-VBL-REL-ALL
「彼らは砕いた魚の骨を柔らかくなるまで煮た」

(8)　[Wejem-Ø　qet-ə-kena-jtəŋ]AC, mət-k-ajaʕo-ŋvo-la-ŋ.
river-ABS.SG　freeze-E-REL-ALL　1PL.S-IPF-fish-HAB-PL-IPF
「私たちは川が凍るまで釣りをする」

(9)　En'pici-jək　ne-pela-n　kəmiŋ-ə-n　wujv-ə-k,
father-AN.PL. ERG　INV-leave-3SG.P　child-E-ABS.SG　village-E-LOC

---

[8] この他、同系のアリュートル語では、同時性を表わす時間節を形成する -inaŋu が報告されているが (Kibrik i dr. 2000:230)、これは、「道具」を表わす -inaŋ に様態格の -u が付加された名詞化タイプである可能性がある。なお、下例は、Kibrik i dr. (2000) の英訳版である Kibrik et al. (2004) からの引用である。グロスでは、-inaŋu が CONV、すなわち、副動詞 (converb) とされていることに注意されたい（NOM は nominative の略）。

Ənŋ.in　naqam　turə-pkir-inaŋu　awən　aŋaŋta.lʕatə-tkə.
this+NOM+SG　well　just-arrive-CONV　already　sing-IPF
'And this (shaman), having just arrived, already was singing.'　(Kibrik et al. 2004:265)

同様の接辞は、チュクチ語でも報告されている (Skorik 1977: 150-153, Dunn 1999:244)（具体例は紙幅の関係上、省略）。一方、コリャーク語ではこの接辞は現時点では確認されていない。

[kətavan emŋol-kena-jtəŋ]AC.
till miss-REL-ALL
「両親は、息子を寂しがらない間（←寂しがるまで）村に残してきた」

ところで、-kena は、名詞、副詞、動詞語幹に接続し、主要部と属部の様々な関係を示す。名詞的であるとするのは、主要部の名詞と格・数の一致を示すためである。なお、-kena（強形態素）は、母音調和による -kine（弱形態素）という異形態を持つが[9]、方向格接辞 -jtəŋ は強形態素であるため、これに同化して強形態素の -kena が選ばれている。(10e) では、上の (7)(8)(9) の名詞化タイプと同じ -kena-jtəŋ が名詞語幹についていることに注意されたい。

(10a) umk-ə-kin-Ø ɣijnik-Ø
forest-E-REL-ABS.SG wild.animal-ABS.SG
「森の野生動物（単）」

(10b) ənkəjep-kine-t l'əmŋəl'-te
long.ago-REL-ABS.DU story-ABS.DU
「昔話（双）」

(10c) ewji-kine-w wal-u
eat-REL-ABS.PL knife-ABS.PL
「食べるためのナイフ（複）」

(10d) Pojt-ə-kena-k wejem-ə-k ŋənvəq amalvaŋ
Paren'-E-REL-LOC river-E-LOC many various
it-ə-lʕ-o ənn-u.
be-E-PART-ABS.PL fish-ABS.PL
「パレニ川にはいろいろな種類の魚がいる」

(10e) ɣəmmo t-ə-lqət-ə-k-Ø Cajbuqa-kena-jtəŋ wajam-etəŋ.
I(ABS) 1SG.S-E-go-E-1SG.S-PF Chajbuxa-REL-ALL river-ALL
「私はチャイブハ川に行った」

3.1.2. -nv-etəŋ/-nv-ə-ŋ/-nv-ə-k「～するため」

-nv-etəŋ/-nv-ə-ŋ/-nv-ə-k は、目的節を形成する。動詞語幹に接続して「～する場所」を意味する接尾辞 –nv（語末の絶対格単数形は-nə）（ŋəto-nə「出口」[ŋəto「出る」]、təla-nə「道」[təla]「行く」）に方向格接辞 -etəŋ か、与格接辞 -ŋ か、場所格接辞 -k が接続している。3 つの格接尾辞の使い分けは今のところ明らかではない。ちなみに Zhukova (1972) では、*supin*「目的分詞」として -nv-etəŋ と -nv-ə-ŋ があげられている。

(11) T-ə-k-ekmin-ŋ-ə-n nalɣ-ə-tʕul-Ø, [jaleko-nv-etəŋ]AC.
1SG.A-E-IPF-take-IPF-E-3SG.P skin-E-piece-ABS.SG slide.down-place-ALL

[9] コリャーク語の母音調和について、詳しくは呉人 (1999:49-64) を参照のこと。

「私は橇すべりするために１枚の毛皮を持って行った」

(12) Jəqmitiw k-ena-n-ə-kj-aw-ŋəvo-ŋ-Ø,
in.the.morning IPF-1SG.P-CAUS-E-wake.up-CAUS-HAB-IPF-3SG.A
[melɣ-at-ə-nv-ə-ŋ]AC.
fire-VBL-place-E-DAT
「朝、彼／彼女は火を焚くために私を起こす」 (=1)

(13) [Təla-ma]AC, ko-penni-ŋvo-ŋ, [wenn'at-ə-nv-ə-k]AC.
go-COM IPF-fall-HAB-IPF-3SG.S help-E-place-E-LOC
「彼／彼女は出かけている途中でも、手伝うために飛んできてくれた」

3.2. 非名詞化タイプ

副詞節の非定形動詞の動詞語幹と結合する格接辞には、場所格 (–k)、道具格 (-e/-a/-te/-ta)、与格 (-ŋ)、共同格 (-ma[10])、随格 (ɣejqə-/ɣajqə-..-e/-a/-te/-ta) がある。このうち最も広い意味範囲を表わすのは場所格で、時間節、原因節、順接条件節、逆接条件節に用いられる。道具格は時間節、原因節、様態節に用いられる。与格は付帯状況を表わす様態節、引用節を導く副詞節、共同格と随格は同時性を表わす時間節にのみ用いられる。

3.2.1. 場所格（-k）

3.2.1.1. 時間節：「～した後で」「～する時」「～する前」

Zhukova (1972) によれば、場所格 -k は主節の動詞が表わす動作に先行する動作を表わす。しかし、実際には、同時性を表わす場合も、後行する動作を表わす場合もあり、どのような時間関係を表わすかは文脈によるのではないかと考えられる。次例 (14)(15)(16) では、「～した後で」の意味を表わしている。

(14) [Jajt-ə-k]AC, kəta t-ewji-k-Ø.
return.home-E-LOC only 1SG.S-eat-1SG.S-PF
「家に帰ってから、やっと私は食べた」

(15) [Kəta en'pici-w wojv-ə-ŋqo jet-ə-k]AC, vitku
only father-ABS.PL village-E-ABL come-E-LOC first
məc-ca-jalɣ-ə-la-ŋ ŋalvəlʕ-etəŋ.
1S-POT-move-E-PL-POT reindeer.herd-ALL
「両親が村から戻ってきたら、群れに移動しよう」

[10] より正確に言うならば、-ma は共同格接辞 ɣa-..-ma の後部要素。Zhukova (1972) によれば、この共同格の形式はあまり使われないという。ɣe-/ɣa-..-e/-a/-te/-ta の形式の方が一般的。

(16) [Utɣ-et-ə-k]AC, vitku
soft-VBL-E-LOC first
ne-ku-kejitku-ŋ-new.
INV-IPF-cut.something.into.small.pieces-IPF-3PL.P
「柔らかくなった後で、初めて彼らはそれらを細かく刻んだ」

次の (17)(18)(19) は、主節の動作との同時性を表わしている。

(17) [Əməŋ alolqew-ŋəvo-k]AC, ə-nan cinin
all go.for.berry-HAB-LOC 3SG-ERG by.oneself
na-ko-llajv-ə-ŋvo-la-mək.
INV-IPF-take.along-E-HAB-PL-1PL.P
「皆でベリー摘みに行く時、彼／彼女はいつも自分で私たちを引率した」

(18) [Tajŋatənv-etəŋ qən-ŋəvo-k]AC,
fishing.camp-ALL go-HAB-LOC
ne-k-imt-ə-ŋ-new.
INV-IPF-carry.on.one's.back-E-IPF-3PL.P
「彼らは漁場に行く時には，それらを背負って行った」

(19) [Qəleva-w imti-k]AC, ləɣan ɣa-panc-al-lenaw.
bread-3PL.ABS carry.on.one's.back-LOC accidentaly RES-flat-VBL-3PL.S
「パンを背負っていたら、うっかりぺしゃんこになってしまった」

また、(20)(21) のように、主節に後行する動作を表わす例も見られる。

(20) [Kəta javac jəlqan-ŋəvo-k]AC, ajkola-w
only later sleep-INH-LOC bedclothes-ABS.PL
mət-ko-natv-ə-ŋ-naw.
1PL.A-IPF-bring.home-E-IPF-3PL.P
「私たちは、後で寝る前に寝具を家に運び入れた」

(21) [ʕeja-ŋvo-k]AC, ujetiki-w
race.in.a.reindeer.sledge-INH-LOC sledge-ABS.PL
na-ko-n-coccim-aw-ŋ-ə-naw.
INV-IPF-CAUS-get.ready-CAUS-IPF-E-3PL.P
「彼らは、トナカイ橇競走が始まる前に橇の準備をした」

3.2.1.2.　原因節

-k は、原因節を形成する際にも用いられる。節初頭には任意で接続詞 məjew「なぜなら」が出現する。

(22) [(Məjew) ɣəmnin-Ø lewət-Ø təʕəl-ə-k]AC,
because my-ABS.SG head-ABS.SG ache-E-LOC
vetat-ə-nv-etəŋ ecɣi qəjəm m-ə-lqət-ə-k.
work-E-place-ALL today not 1SG.S.OPT -E-go-E-1SG.S.OPT
「私は、今日は頭が痛いので、仕事には行かない」

(23) [(Məjew) ajɣəve unmək muqe-t-ə-k]AC emʕu=qun
because yesterday very.much rain-VBL-E-LOC so
n'uce-l'q-ə-n imciɣu-i-Ø.
earth-surface-E-ABS.SG get.wet-PF-3SG.S
「昨日、大雨が降ったので、地面が濡れた」

3.2.1.3.　条件節

-k は条件節を形成する際にも用いられる。順接条件節の場合、節初頭には任意で、接続詞 ekilu/ŋeveq「もし」が出現する。ekilu と ŋeveq の意味的な違いについては、現時点では明らかにできていない。また、逆接条件節の場合には、接続詞 qej/qəʕewən が任意で出現する。qej と qəʕewən の意味的な違いは明らかではない。

(24)(25) は順接条件節の例である。

(24) [(Ekilu/ŋeveq) kajŋ-ə-tʕul-u jet-ə-k]AC, to jaqam
if if bear-E-piece-ABS.PL bring-E-LOC and immediately
ɣe-ccil-e milq-ə-l'q-ə-k.
COM-put-COM drying.area-E-surface-E-LOC
「もしクマ肉を運んできたら、すぐに物干し台に置きなさい」

(25) [(Ekilu) kəmiŋ-ə-n ɣətʕev-ə-k]AC, to ewənʕət ənno
if child-E-ABS.SG get.hungry-E-LOC and anyway 3SG.ABS
ja-tejŋ-ə-ŋvo-ŋ-Ø.
POT-cry-E-INH-POT-3SG.S
「子供はもしお腹がすいたら、泣き出すだろう」

(26)(27)(28) は逆接条件節の例である。

(26) [(Qej/ qəʕewən) unmək pəkav-ə-k]AC, ewəncam
even.if even.if very.much be.able.to-E-LOC anyway

ɣa-ja-vetan-ŋəvo-ta.
COM-try-work-HAB-COM
「ちゃんとできなくても、とにかく頑張りなさい」

(27) [(Qej/ qəʕewən) əjava-k jətvat-ə-k cawat-o]AC,
even.if even.if remote.place-LOC put-E-LOC lasso-ABS.PL
ewəncam mel'kəcil t-ə-ko-joʕ-ə-ŋ-naw.
anyway enough 1SG.A-E-IPF-get-E-IPF-3PL.P
「私はたとえ遠くに投げ縄を置いてきても、必ず取ってくる」

(28) [(Qej/ qəʕewən) ɣəcci unmək ŋocəcʕat-ə-k]AC, ewəncam
even.if even.if 2SG.ABS very.much get.angry-E-LOC anyway
qəjəm m-ə-lqət-ə-k ŋalvəlʕ-etəŋ.
not 1SG.S.OPT-E-go-E-1SG.S.OPT herd-ALL
「たとえお前がひどく怒っても、私はいずれにしろトナカイの群れには行かない」

3.2.2. 道具格（-e/-a/-te/-ta）

道具格 (-e/-a/-te/-ta) は、同時性を表わす時間節、原因節、様態節を形成する場合に用いられる。語頭に em-/am-「ただ」という接頭辞が共起することが多い。

3.2.2.1. 時間節：「～する間に」「～すると」

(29) ɣəm-nan t-ə-cvi-tku-new-Ø [ɣəcci em-jəlqet-e]AC.
1SG-ERG 1SG.A-E-cut-ITR-3PL.P-PF 2SG.ABS only-sleep-INS
「お前が寝ている間に、私はそれらを切った」

(30) [Tuj-kəmʕəli-ta palana-ŋqo]AC joccav-ə-na-k
new-return-INS Palana-ABL Joccaw-E-AN.SG-LOC(ERG)
k-in-iv-ə-ŋ-Ø, 'ecɣi=van mejŋet-e-Ø.
IPF-1SG.P-say-E-IPF-3SG.A now grow.up-PF-2SG.S
Mel'kəcil' q-ə-vetat-ekən.
you.may 2SG.S.OPT-E-work-OPT
「パラナから戻るとすぐに、ジョッチャウは私に言った、『もう大きくなったのだから、働いていいよ』」

3.2.2.2. 原因節

(31) [Am-ŋotəcʕa-ta ɣəmka-jtəŋ Kamak-Ø]AC, ujŋe e-winn'et-ke
only-get.angry-INS 1SG-ALL Kamak-ABS.SG not not-help-not
t-ə-ku-nt-ə-ŋ-ə-n
1SG.A-E-IPF-do-E-IPF-E-3SG.P

「カマクは私に腹を立てたので、私は彼の手伝いをしていない」

3.2.2.3.　様態節

(32) [Am-jəkcav-a]AC,　t-ə-ko-lajv-ə-ŋvo-ŋ　ɣəmɣənqo.
only-hurry-INS　1SG.S-E-IPF-walk-E-HAB-IPF　here.and.there
「私は急いであちこち歩いている」

(33) [Nota-jpəŋ　em-lejv-ə-tku-te]AC,　t-ə-k-en-ŋəvo-ŋ.
tundra-PRL　only-walk-E-ITR-INS　1SG.S-E-IPF-be-E-HAB-IPF
「私はツンドラを徒歩で行く」

(34) Ekilu　ɣa-pʕa-lenaw,　waca　[kəcɣ-ə-nu-te]AC
if　RES-dry-3PL.S　sometimes　dry-eat-INS
ne-ku-nt-ə-ŋ-new.
INV-IPF-do-E-IPF-3PL.P
「それらが乾燥した時には、彼らはそれらを乾燥したまま食べる」

3.2.3.　与格（-ŋ）

3.2.3.1.　様態節

与格は付帯状況を表わす様態節を形成する際に用いられる。

(35) En’pic-Ø　[vaɣal-ə-ŋ]AC,　ŋajŋən　ku-cvi-tku-ŋ-Ø.
father-ABS.SG　sit-E-DAT　outside　IPF-cut-ITR-IPF-3SG.S
「父は外ですわって木を切っている」

(36) Qajəkmiŋ-a　[jəltel-ə-ŋ]AC,　k-ə-ʕajŋew-ŋ-ə-ni-n
son-INS(ERG)　lie-E-DAT　IPF-E-call-IPF-E-3SG.A-3SG.P
əlʕa-Ø.
mother-ABS.SG
「息子は横になって母親を呼んでいる」

3.2.3.2.　引用節導入

与格は引用節を導入する副詞節を形成する場合にも用いられる。

(37) [ŋajen　ev-ə-ŋ]AC,　‘ku-tənmet-ə-ŋ-Ø.’
that(ABS)　say-E-DAT　IPF-cheat-E-IPF-2SG.S
「その人いわく、「あなたは私をだましているのよ」」

(38) Vəʕajok ŋaje-n pəttoŋ-ə-cʕ-ə-n ɣe-le-lin
later that-ABS.SG rich-E-PART-E-ABS.SG RES-go-3SG.S
qaqqa-jəka-jtəŋ, [ev-ə-ŋ]AC, ‘cimqəp ŋellə-Ø
Qaqqa-AN.PL-ALL say-E-DAT part reindeer.herd-ABS.SG
t-ə-j-ekmin-ŋ-ə-n’.
1SG.A-E- OPT-take-OPT-E-3SG.P
「その後、その金持ちはカッカのところに行って、いわく、『トナカイの群れの一部を私がもらおう』」

3.2.4. 共同格（-ma）

共同格 ɣa-..-ma の後部要素 -ma は、同時性を表す時間節の述語動詞語幹につく。なお、(40)(41) では、ɣəmmo「私」、ɣəmnin qoja-ŋa「私のトナカイ」は副詞節の中に入れてあるが、これを主節の主語とみなし、主節の主語と述語の間に副詞節が挿入されたという解釈もありえる。

(39) [En’pic-Ø ajaʕo-ma]AC, ɣəmmo t-ə-ku-te-picɣ-ə-ŋ-ə-ŋ.
father-ABS.SG hook-COM 1SG.ABS 1SG.S-E-IPF-make-food-E-make-E-IPF
「父が釣りしている間、私は食事の支度をしている」

(40) [ɣəmmo awje-ma]AC, vaca t-ə-ko-ta-jəcc-ə-ŋ-ə-ŋ.
1SG.ABS eat-COM sometimes 1SG.S-E-IPF-make-thread-E-make-E-IPF
「私は食べながら糸を撚っている」

(41) [ɣəmnin qoja-ŋa tənəcve-ma]AC, ko-kjajtlʕat-ə-ŋ-Ø.
my(ABS.SG) reindeer-ABS.SG cut.horn-COM IPF-kick-E-IPF-3SG.S
「私のトナカイは、角切りしている間、足をばたつかせていた」

3.2.5. 随格（ɣejqə-/ɣajqə-..-e/-a/-te/-ta）

随格 ɣejqə-/ɣajqə-..-e/-a/-te/-ta も共同格と同様に、同時性を表わす時間節の述語動詞語幹につく。同じく同時性を表わす共同格 -ma との意味的な違いは，今のところ明らかにしえていない。なお、(42) では、pəciqa-w「鳥（複）」は副詞節の中に入れてあるが、これを主節の主語とみなし、主節の主語と述語の間に副詞節が挿入されたという解釈もありえる。

(42) [Pəciqa-w ɣejq-ə-ʕajŋe-te]AC ɣala-la-j-Ø om-nota-jtəŋ.
bird-ABS.PL ASC-E-sing-ASC pass-PL-PF-3S warm-earth-ALL
「鳥たちは、鳴きながら暖かい土地に向かって通って行った」

(43) [Wanolŋ-ə-n　ɣejq-ə-jɣu-te]AC,　ŋəvo-j-Ø　kumŋəcij-ə-k.
bib-E-ABS.SG　ASC-E-bite-ASC　begin-PF-3SG.S　scream-E-INF
「彼女は胸当てを噛みながら叫び始めた」

3.2.6.　まとめ

以上、見てきた名詞化タイプと非名詞化タイプがどのような副詞節に用いられるのか，その分布をまとめると、下表のようになる。

表：名詞化・非名詞化タイプで用いられる格接辞と副詞節の種類

タイプ	形式	格	時間節	目的節	原因節	条件節	様態節	引用節導入
名詞化	-kena-jtəŋ	方向	○					
	-nv-etəŋ	方向		○				
	-nv-ə-ŋ	与		○				
	-nv-ə-k	場所		○				
非名詞化	-k	場所	○		○	○		
	-e/-a/-te/-ta	道具			○		○	
	-ŋ	与					○	○
	-ma	共同	○					
	ɣejqə-/ɣajqə-..-e/-a/-te/-ta	随	○					

格接辞は名詞化タイプが 3 種類であるのに対し、非名詞化タイプは 5 種類、副詞節の表わす機能は名詞化タイプが時間節と目的節の 2 種類に限られるのに対し、非名詞化タイプは時間節、原因節、条件節（順接・逆接とも）、様態節、引用節導入節の 5 種類をカバーしている。このことから、コリャーク語の副詞節では、名詞化タイプよりも非名詞化タイプの方が優勢であることがうかがえる。

4.　周辺の他言語の「非名詞化タイプ」

北東アジアにおいて、大部分の言語の格接辞による副詞節の述語動詞が名詞化タイプを示すなかで、裸動詞語幹に格接辞がつく非名詞化タイプ②-1 が優勢なコリャーク語は特異な印象を与える。しかし、Anderson (2006) によれば、ユカギール語とユピック語に同様の非名詞化タイプが見られるという。

4.1.　ユカギール語

まず、ユカギール語について見る。ユカギール語では、副動詞形とは別に、＜動詞語幹＋（動詞複数接辞）＋所有人称接辞＋格接辞＞という形式が副詞節を作ることがある。遠藤 (2006) は、名詞化接尾辞 -l による動名詞が斜格に立つとき、この -l が脱落することが多いとしている。Anderson (2006) は、このような副詞節を -l が脱落した名詞化タイプと見

ているようである。次は Anderson (2006:9) が Maslova (2003:372) から引いているコリマ（オドゥル）・ユカギール語の例である。Maslova (2003:372) からそのまま引用する。便宜的に後半部は省略する。

(44) qāqā-pe-gi ajlī-de-ge ‘el+qon-ŋi-lek’ mon-de-ge
grandfather-PL-POSS forbid-3SG-DS NEG-go-PL-PROH-2 say-3-DS
‘their grandfather forbids (it), saying ‘don’t go.’

長崎 (2013: 47) は、同様の例について -l が脱落したととらえ、次のように (-L) としてグロスを付している。

(45) irkid’e taat **modo-ŋi-de-ge,** irkin ʃoromo
あるとき このように 暮らす-PL(-L)-POSS.3-LOC 1つの 人
kel-l’el
来る-IDEV:IND.INTR.3
「あるとき、［彼らが］そのように暮らしていると、1 人の人がやってきた」

一方、Anderson (2006) では非名詞化の例はあげられていないが、長崎 (2013:47) の次例は、所有人称接辞を介さずに動詞語幹に場所格が接続しているように見える。

(46) qodoo-ŋi uzhe bojt’e t’iile **ulumu-ge**
横たわっている-PL:IND.INTR.3 すでに(Rus.) 完全に 力 尽きる-(L)-LOC
「［彼らは］横たわっていた、すでに力が尽きてしまって」

ただし、この例についても、長崎 (2013) は、グロスからうかがえるように名詞化接辞 -l が子音始まりの接尾辞の前で脱落しているととらえているようである[11]。

以上から、ユカギール語が名詞化、非名詞化両タイプを示すかどうかの判断は、現時点では保留にしておくのが妥当であろう。

4.2. ユピック語

一方、ユピック語については、非名詞化タイプを示すと考えられる根拠があるように思われる。Anderson (2006) では、具体例は挙げられていないものの、ユピック語に裸動詞語幹に格接辞がつく非名詞化タイプがみられるとされている。

このようなタイプは確かに、北米側ではセント・ローレンス島、ロシア側ではチュコト

[11] 長崎郁氏（私信）によれば、上述の -l による動名詞の他に格接辞を取るものとして結果名詞 (-ool) があるが、-ool の末尾の l も子音始まりの格接尾辞が接続すると、次のように脱落することがあるという。
tude oGoo-l-oo-ge
彼の 立っている-挿入子音-結果名詞-場所
「自分の立っていたところに」

カ半島に分布する Central Siberian Yupik 語（以下、便宜的に「ユピック語」）に観察される[12]。

de Reuse (1994) によれば、ユピック語には下例 (47) のような名詞化のタイプが見られる。

(47) Neneghmeng　taaqegkumta　kiighqughlleqanka.
negh-negh-meng　taaqe-kumta　kiighqugh-lleqe-anka
eat-act.of.V-ing-MDs　finish-CDO(1p)　split-FUT-IND(1s-3p)
'I'll cut them (fish) after we eat (i.e., when we finish eating).'
(de Reuse 1994:57)

その一方で、ユピック語では、他のエスキモー語族の言語と異なり、動詞が名詞のように語形変化することが観察される。すなわち、通常ならば、名詞化が起こるところで起こらずに、動詞語幹が直接、格接辞と結びつく。これは、粗野で下品でインフォーマルな形式であると考えられているという。(48) から (58) は、de Reuse (1994) から引いた、動詞語幹に絶対格 (Absolutive)、関係格 (Relative)、場所格 (Localis)、様態格 (Modalis)、方向格 (Terminalis)、等格 (Equalis) がついた例である。

4.2.1.　絶対格

動詞語幹に絶対格がついた例は、子供や子供に話しかける人、感情的な場面での年配者ななどの発話に見られるという。巧みに語られた物語ではあまり一般的ではない一方、日常会話ではきわめてよく聞かれるという。

(48) Mangteghangllaq!
mangteghag-ngllagh-Ø
house-make.N-ABs
'Making a house!' (Answer of a child to the question: 'What did they do?')
(de Reuse 1994:35)

(49) Whanga　tuguteliq.
whanga-Ø　tugute-ligh-Ø
PN1-ABs　tusk-provide.with.N-ABs
'I am going to put the tusks on.' (A child making a walrus out of modeling clay.)
(de Reuse 1994:35)

4.2.2.　関係格

関係格を取る動詞は、原因節を形成する。

---

[12] エスキモー語は、大きく、東エスキモー語と西エスキモー諸語に分類される。西エスキモー諸語はさらに①アラスカ・ユピック語 (Alaskan Yupik)、②スフピアック語 (Sugpiaq)、③シベリア・ユピック語 (Siberian Yupik)（あるいは、チャプリン語 [Chaplin]）、④ナウカン語 (Naukan)、⑤シレニキ語 (Sireniki)からなる。このうち、③④⑤はロシア側のチュコトカ半島に分布する。

(50) Aghyum naavuk.
aghyugh-m naave-uk
get.old-RLs break-IND(3d)
'It (a stove) broke because it's old.' (de Reuse 1994:36)

(51) qepgham naavyightestellgha.
qepghagh-m naavyigh-(te)ste-llegh-(ng)a
work-RLs become.very.tired-CAUS-activity.of.V-ing-AB(3s-s)
'It's running out of energy because of too much work.' (de Reuse 1994:36)

4.2.3. 場所格

場所格をとる動詞は、「～する時」を意味する時間節を形成する。

(52) neqangisagllagmi
neqa-(ng)isag-ghllag-mi
food-lack.N-V.in.a.big.way-LCs
'in a time of famine' (de Reuse 1994:36)

(53) ughunqightughtemmi
ughunqigtughte-mi
for.there.to.be.thawed.patches-LCs
'in the time of thawed patches' (de Reuse 1994:36)

4.2.4. 様態格

様態格を取る動詞は、様態節を形成する。

(54) tagiiq piyugmeng.
tagi-uq piyug-meng
come-IND(3s) walk-MDs
'He came walking.' (de Reuse 1994:37)

(55) Kiitiqaq ellmi tuungminun
kiitigh-kagh-Ø ell-mi tunge-minun
wound.by.bullet-one.that.has.been.V-ed-ABs PN-RL(3R) vicinity-TM(3Rs)
kaasimaaq aaghhwmeng.
kaate-(i/u)ma-uq aaghhw-meng
arrive-PST-IND(3s) crawl-MDs
'The shot person arrived crawling to his own side.' (de Reuse 1994:37)

4.2.5.　方向格

方向格を取る動詞は、目的節を形成する。

(56) Aghallegtam　aghaliitaanga
aghallegh-m　agha-ligh-(u)te-aanga
doctor-RLs　medicine-provide.with.N-TR-IND(3s-1s)
naasqiqemnnun.
naasqugh-iqe-mnun
head-for.N.to.ache-TM(1s-s)
‘The doctor gave me medicine for my headache.’　(de Reuse 1994:38)

4.2.6.　等格

等格を取る動詞は、様態節を形成する。

(57) aghulaaquq　pinitun
aghula-aqe-uq　pinigh-tun
dance-PROG-IND(3s)　be.good-EQs
‘He is dancing well.’　(de Reuse 1994:38)

(58) Ellngit　aklumatun　kiyaghsimaat.
ell-(ng)it　aklu-(i/u)ma-tun　kiyaghte-(i/u)ma-ut
PN-AB(3p)　be.in.need-PST-EQs　live-PST-IND(3p)
‘They lived in poverty.’　(de Reuse 1994:39)

ところで、前述のように、ユピック語はロシア側チュコトカ半島と北米側のセント・ローレンス島で話されているが、(48)から(58)の de Reuse (1994) の例には、de Reuse のセント・ローレンス島でのフィールドワークで得られたデータのみならず、de Reuse (1994) が Rubtsova (1971) から引用した (55)(58)などのロシア側のデータも含まれている。したがって、非名詞化タイプは北米側、ロシア側いずれのユピック語でも見られるといえる。ちなみに、同じくロシア側で話されているナウカン語でも、動詞語幹に道具格接辞が付加された形式が動作の様態を表わす副詞的な意味を、動詞語幹に与格接辞が付加された形式が目的を表わすことが報告されている (Menovshshikov 1975)。

以上のことから、非名詞化タイプは、エスキモー語族においてロシアと北米にまたがって分布するユピック語やロシア側に分布するナウカン語だけに見られ、かつ日常会話で用いられるインフォーマルな言い方であるとすると、エスキモー語族に本来あったものではなく、隣接するコリャーク語を含むチュクチ・カムチャツカ語族との接触の結果、獲得されたものだという可能性が浮上する。

5.　非名詞化タイプのその他の用法

以上、コリャーク語の副詞節の非定形動詞として出現する名詞化タイプと非名詞化タイプについて見てきたが、名詞化タイプと非名詞化タイプの非定形動詞は、副詞節以外にも見られる。まず、名詞化タイプとしては、名詞項として用いられる以外に、名詞節の述語になったり、主節の述語として義務のモーダルな意味を表わしたりする動作名詞 (-ɣiŋ) や、主節の主語として義務のモーダルな意味を表わしたりする動作主・被動作主名詞 (-lqəl) などが報告されている（呉人 2014）。

一方、非名詞化タイプとしては、これまで、動詞語幹に場所格がつく不定詞と、動詞語幹に共同格がついて命令の意味を表わす形式が認められている。裸の動詞語幹に格接辞がつく非名詞化タイプ（すなわち②-1 タイプ）は、北東アジアの周辺の諸言語には認められない特異なタイプである。そのような特異なタイプが、副詞節のみならず、不定詞、命令など、複数の機能として浸透していることは重要である。非名詞化タイプを名詞化タイプの浸食形式であるとする見解（Malchukov 氏私信）に一石を投じる可能性がある。

以下では、非名詞化タイプである不定詞と命令形式について見る。

5.1.　不定詞：動詞語幹＋場所格（-k/-kkə）

動詞語幹に場所格が付加されると、副詞節のみならず不定詞が形成される。印欧語の不定詞が起源的には動作名詞の一種で、その格形式のひとつが遊離して固定化されたといわれることを考えれば（亀井等編著 1995）、場所格が不定形として用いられることは珍しくはないのかもしれない。

(59)　cejmev-ə-k「近づく」, təʔəl-ə-k「痛む」, ŋəvo-k「始まる／始める」, ɣit-ə-k「見る」, tejk-ə-k「作る」, ju-kkə「食べる」

しかし、この形式の用法は、印欧語のそれに比べれば、限定的であり、動詞の目的語として用いられるのみである。独立文として感嘆や命令を表わしたり、文中で主語や補語になったりすることはない。

不定形が付加される主要部動詞には、「始まる／始める」「終わる／終える」などの phasal verb がある。

(60)　ŋanqo　ko-ŋvo-la-ŋ-Ø　cicɣ-ə-tala-ta　ewji-k.
after.that　IPF-begin-PL-IPF-3S　meat-E-mince-INS　eat-INF
「その後，彼らは肉団子を食べ始める」

(61)　Jatan　ŋəjaq　klas-o　t-ə-plitku-new-Ø　kalicit-ə-k.
only　four　class-ABS.PL　1SG.A-E-finish-3PL.P-PF　study-E-INF
「私は 4 学年の勉強を終えたばかりだった」

不定詞は、「できる」「できない」といったモーダルな動詞にも付加される。

(62) Ləɣan t-ə-ko-pkav-ə-ŋ wan’av-at-ə-k.
even 1SG.S-E-IPF-be.unable.to-E-IPF word-VBL-E-INF
「私は話すことすらできなかった」

(63) Tite t-ə-mit-ə-tvi-k-Ø ʕewen-ə-k, ənn’aq
when 1SG.S-E-capable-E-VBL-1SG.PF sew-E-INF now
ena-ŋvo-j-Ø j-ə-mit-ə-tv-at-ə-k enolat-ə-k.
1SG.P-begin-PF-3SG.A CAUS-E-capable-E-VBL-CAUS-E-INF cut-E-INF
「裁縫ができるようになると，今度は彼女は私に裁断を教え始めた」

その他、不定詞を取ることのできる動詞には、「嫌う」「喜ぶ」「努力する」「手伝う」「止める」などがある。

(64) Muju mət-ko-ʕanqacʕal-la-ŋ jalɣət-ə-k.
1ABS.PL 1PL.S-IPF-reject-PL-IPF move-E-INF
「私たちは移動したくない」

(65) ənəkqal emənno ɣe-jiʕel-lin jalɣət-ə-k’.
from.her.side by.herself RES-be.glad-3SG.S move-E-INF
「移動するのを喜んだのは彼／彼女だけだよ」

(66) Jeppə ʕəlʕəl ko-tva-ŋ-Ø, ko-tɣəman-ŋəvo-la-ŋ-Ø
yet snow(ABS.SG) IPF-be-IPF-3SG.S IPF-try.hard-HAB-PL-IPF-3S
ine-jiwl-et-ə-k.
ANTIP-carry-ANTIP-E-INF
「雪が少しでもある間は，彼らは運搬する努力をした」

(67) Waca qoja-ɣijke-k ku-winnet-ə-ŋ-Ø.
sometimes reindeer-catch.for.riding-INF IPF-help-E-IPF-3SG.S
「彼／彼女は時にはトナカイを捕まえる手伝いをしてくれた」

(68) Pəce van mət-ko-ʕanqaw-la-ŋ pəjul’ʕet-ə-k.
for.the.time.being 1PL.S-IPF-stop-PL-IPF run.around.on.the.water-E-INF
「しばらくの間，私たちは川の上を走り回るのをやめた」

5.2. 命令：動詞語幹＋共同格（ɣe-/ɣa-...-te/-ta/-e/-a）

裸の動詞語幹に共同格（ɣe-/ɣa-...-te/-ta/-e/-a）が付加されると、命令の意味が表わされる。

(69) Tite=ŋən ineŋ-Ø ɣe-t-ineŋ-ə-ŋ-e.
in.some.time.or.other sledge-ABS.SG COM-make-sledge-E-make-COM
「いつか橇に荷を積みなさい」

(70) [Kitkit it-ə-k picɣ-ə-ŋ]AC, jaqam ɣe-lq-ə-te
as.soon.as run.short.of-E-LOC food-E-DAT immediately COM-go-E-COM
anotvanv-etəŋ.
spring.camp-ALL
「食料が足りなくなったらすぐに、春営地に行きなさい」

6. おわりに

本稿では、コリャーク語の副詞節の述語動詞の 2 つのタイプ、すなわち、名詞化タイプと非名詞化タイプの特徴を記述した。また、このうち、動詞語幹に名詞のように格接辞を付加する珍しいタイプである非名詞化タイプが周辺の諸言語に見られるか、見られるとしたらコリャーク語との間にどのような影響関係が想定されるかについて考察した。さらに、このような非名詞化タイプがコリャーク語では他にどのような用法に見られるのかを探った。その結果、次のような点が明らかになった。

① 名詞化タイプでは、方向格、与格、場所格が名詞化された動詞語幹につき、時間節、目的節の述語動詞を形成する。一方、非名詞化タイプでは、場所格、道具格、与格、共同格、随格が裸の動詞語幹につき、時間節、原因節、条件節、様態節、引用節導入節などを形成する。このように、コリャーク語では非名詞化タイプのほうが、用いられる格接辞の種類、表わしうる副詞節の種類において優勢である。

② 周辺の言語の中では、唯一、エスキモー･アリュート語族のユピック語、ナウカン語に同様の非名詞化タイプが副詞節として用いられている例が観察される。エスキモー･アリュート語族の他の言語にはこのような例が見られないこと、話者にインフォーマルな言い方であると認識されていることなどから、コリャーク語を含むチュクチ・カムチャツカ語族からの影響の可能性が考えられる。ちなみに、de Reuse (1994) には、ロシア人の東シベリアへの進出の時期、エスキモーはチュクチに経済的により依存しており、母語のエスキモー語に加え、チュクチ語とのバイリンガルであることが求められたと記述されている。チュクチ語が優勢言語であったとすれば、エスキモー語がそこから影響を受けることは十分にありえることである。

③ コリャーク語では、非名詞化タイプは、副詞節のみならず、不定詞や命令形式にも見られ、動詞が名詞のように格標示を受けることが浸透していると考えられる。

【略語表】

コリャーク語以外に本稿で挙げた例は著者の方針を尊重してそのまま引用してあり、グロスなどの統一は図っていない。そこで、コリャーク語と異なる略語を以下にコリャーク語とは別に挙げるものとする。

＜コリャーク語＞

A=agent-like argument	ABL = ablative	ABS = absolutive
ALL=allative	AN=animate	ANTIP=antipassive
ASC=associative	CAUS=causative	COM=comitative
DAT=dative	DU=dua	E=epenthetic
ERG=ergative	HAB=habitual	INF=infinitive
INH=inchoative	INS=instrumental	INT=intensifier
INTR=intransitive	INV=inverse	IPF=imperfective
ITR=iterative	LOC=locative	OPT=optative
P=patient-like P-argument	PART=participle	PF=perfective
PL=plural	POSS=possessive	POT=potential
PRL=prolative	REL=relational	RES=resultative
S=single argument	SG=singular	VBL=verbalizer

＜ユカギール語＞

DS=different subject marker	IDEV=間接証拠	PROH=prohibitive
NEG=negative		

＜ユピック語＞

CDO=Conditional mood	d=Dual number	EQ=Equalis case
IND=Indicative mood	LC=Localis case	MD=Modalis case
N=Noun base	p=Plural number	PN=pronoun
PROG=Progressive	PST=Past tense	R=Restricted
RL=Relative case	S=singular number	TM=Terminalis case
TR=Transitivizing postbase	V=verb base	

参考文献

Ajatginina, T. N. & Kurebito, M. (eds.)(2006) *Korjaki-kochevniki: ix obychai, obrjady i skazki*. Sapporo: Otdelenie filologicheskix issledovanij pri aspiranture universiteta Xokkaido.

Anderson, G. D. S. (2006) Towards a Typology of the Siberian Linguistic Area. In Y. Matras, A. McMahon and N. Vincent (eds.) *Linguistic Areas: Convergence in Historical and Typological Perspective*, 266-300. Houndmills: Palgrave Macmillan.

Coupe, A. R. (2006) Converbs. In *Keith Brown* (ed.) E*ncyclopedia of Language & Linguistics (Second Edition)*, 145-152. Elsevier Science.

Dunn, M. (1999) *A Grammar of Chukchi*. A thesis submitted for the degree of Doctor of Philosophy of Australian National University.

遠藤 史 (2006)『コリマ・ユカギール語の輪郭―フィールドから見る構造と類型』名古屋：三恵社.

Genetti, C. (1986) The Development of subordinators from postpositions in Bodic Languages. *Berkeley Linguistic Society* 12: 387-400.

Haspelmath, M. (1995) The converb as a cross-linguistically valid category. In Haspelmath, M. & König, E. (eds) *Converbs in cross-linguistic perspective*, 1-55. Berlin & New York: Mouton de Gruyter.

亀井 孝・河野六郎・千野栄一編著 (1995)『言語学大辞典　第 6 巻』東京：三省堂.

Kibrik, A. E., Kodzasov, S. V. i Muravyova, I. A. (2000) *Jazyk i folklor alutortsev.* Moscow: Nasledie.

Kibrik, A. E., Kodzasov, S. V. and Muravyova, I. A. (2004) *Language and folklore of the Alutor people*. ELPR Publication Series A2-042. Suita: Faculty of Informatics, Osaka Gakuin University.

呉人 惠 (1999)「チュクチ・カムチャツカ語族の母音調和に関する一考察」『富山大学人文学部紀要』3: 49-64.

呉人 惠 (2010)「コリャーク語の-Nvo が表わす始動アスペクトと習慣アスペクト」『北海道立北方民族博物館研究紀要』19: 43-55.

呉人 惠 (2014)「コリャーク語における動作名詞と動作主・被動作主名詞―名詞化の度合いに注目して―」『北方言語研究』4: 43-64.

Kurebito, M. (2012) Adverbial Clauses in Koryak: Degrees of Subordination and the Five Levels. 『北方人文研究』5: 71-94.

Maslova, E. (2003) *A Grammar of Kolyma Yukaghir*. Berlin & New York: Mouton de Gruyter.

Menovshshikov, G.A. (1975) *Jazyk Naukanskix Eskimosov*. Leningrad: Nauka.

長崎 郁 (2013)「コリマ・ユカギール語の動詞屈折形式：分詞の統語機能と形態」『北方言語研究』3: 41-54.

Nedjalkov, I. V. (1998) Converbs in the languages of Eastern Siberia. *Language Sciences* 20 (3): 339-351.

de Reuse, W. J. (1994) *Siberian Yupik Eskimo, The Language and Its Contacts with Chukchi*. Salt Lake City: University of Utah Press.

Rubtsova, E. S. (1971) *Éskimossko-russkij slovar'.* Moskva: Izdatel'stvo Sovetskaja Éntsiklopedia.

Skorik, P. Ja. (1977) *Grammatika chukotskogo jazyka, chast' II*. Leningrad: Nauka.

Zhukova, A. N. (1972) *Grammatika korjakskogo jazyka*. Leningrad: Izdatel'stvo Nauka.

Nominalizing Type and Non-nominalizing Type in Koryak Adverbial Clauses

Megumi KUREBITO
(University of Toyama)

The purpose of the present paper is to examine two types of verb marking in adverbial clauses, that is, the nominalizing type and the non-nominalizing type, in the Chukchi-Kamchatkan language, Koryak.

Besides the exclusive use of so-called converb forms, Siberian languages are well known for making rich use of case morphology to mark a range of functional types of subordinate clauses. With regard to case-marked subordination, there are two basic formal subtypes. In one type, the nominalizing type, the case affix attaches to a nominalized form of the verb. Meanwhile, in the other—the non-nominalizing type—the case affix attaches to either a bare verb stem, a semi-inflected form of the verb, or a finite verb form. Koryak shows both the nominalizing type and the non-nominalizing type of verb marking. In the latter type, the case affix attaches to a bare verb stem.

Through examination, the present paper clarifies the following points:

1) In the nominalizing type, either the allative, dative, or locative case attaches to the nominalized stem and marks either temporal clause or purposive clause. Meanwhile, in the non-nominalizing type, either the locative, instrumental, dative, comitative, or associative case attaches to a bare verb stem and marks a range of functional types such as temporal, causal, conditional, concessive, and manner.

2) Among the neighboring languages, only Yupik and Naukan of the Eskimo-Aleut language family share the non-nominalizing type with Koryak. As the non-nominalizing type is not observed in other languages of that family distributed in North America, it is possible that Yupik and Naukan adopted the non-nominalizing type from the Chukchi-Kamchatkan.

3) The non-nominalizing type is observed not only in adverbial clauses but also in an infinitive (in the locative case) and an imperative form (in the comitative case), which shows that this type penetrates into the Koryak grammar.

（くれびと・めぐみ kurebito@hmt.u-toyama.ac.jp）